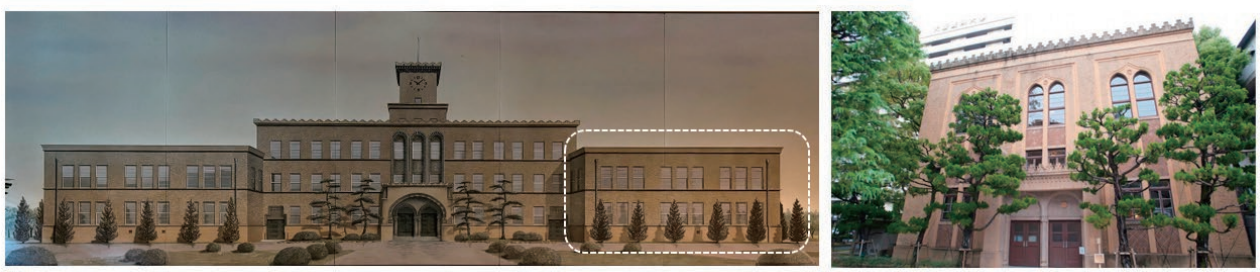
会員の広場

退職のご挨拶

看護学部
地域家族支援看護学領域　社会医学分野　教授　　土手 友太郎

本誌発行の前年度に定年退職する会員が、本欄への寄稿を依頼されることが多いようで、その機会を頂けましたこと有難く存じます。私は学35期生(1986年卒)です。本学の衛生学・公衆衛生学教室Ⅰ・Ⅱの准教授を経て、2010(平成22)年の看護学部開設年度から教授として16年間お世話になりました。在職最終年度の2025(令和7)年7月には病院新本館が開院し、また新しい歴史が始まりました。ご存じの通り、本学の創設としては、1927(昭和2)年に日本初の5年制医学専門学校であった「大阪高等医学専門学校」でした。学舎はウィリアム・メレル・ヴォーリズの設計でした。しかし1990(平成2)年には老朽化のため大半が解体され、左翼棟のみが看護専門学校の校舎として利用された後、歴史資料館として改装され現在に至っています。奇しくも解体前年の1989(平成元)年には東西ドイツのベルリンの壁の崩壊や中国での天安門事件があり、わが国ではバブル崩壊が1990年頃から始まりました。当時は私もなんとなく新たな時代への幕開けだったのかなと思い返しております。1991(平成3)年以後にご入学された先生方はご存じないと思いますので、誌面をお借りして、当時の学舎の思い出や旧学歌について、つづらせて頂きます。旧学舎の再現画を図1に示します。これは総合研究棟の1階ロビーの壁面一杯に描かれています。実際にあった場所は、同棟から阪急線側に少し離れて、7号館寄りでした。私は1989年から院生としてお世話になったのですが、その教室が旧学舎2階でした。また同階には生理学教室もありました。正面入り口を入ると左右に階段が分かれ上階に通じる構造で、全体が重厚な石造りでした。階段の中央部は、余程足繁く通行されていたのでしょうか、すり減って、つるつるに光っていました。硬い石材がこんなにもへこむなんてと驚き、何十年も前からの諸先輩方のご活躍の歴史に厳粛な思いがしました。

図1：旧学舎の再現画



左）旧大学本館(1930～1990) ウィリアム・メレル・ヴォーリズ設計の正面外観図　研究棟1階　ロビー
右）左図の破線枠内は現在の歴史資料館　　(筆者撮影2025.11.22)

ちなみに大阪府立中之島図書館(1904年開館)は1992(平成4)年には左右両翼棟が増築され、国の重要文化財に指定されています。ご来館された先生方もおられると思いますが、構造も内部の雰囲気も、旧学舎にも同じような、荘厳だけれども、懐かしいような印象を抱きました。一方、旧学舎の就労環境はというと、エアコンもなく、石造りのため夏場は石焼、冬場は底冷えで劣悪でしたが、全国的にも貴重な建築遺産で働けたことを感謝し、つらい思い出も今では大切な心の財産にさせて頂いています。また本学が2021(令和3)年4月に大阪医科薬科大学に統合され、ますます発展していくことは喜ばしいのですが、それに伴い学歌もリニューアルされました。図2は統合前の大阪医科大学の学歌で、入学式と卒業式に教授と学生全員に配布された式次第からの抜粋です。式典やクラブ活動で旧学歌のメロディーに長年慣れ親しんできた我々世代は、もう聞けないのは少々残念に思うのではないでしょうか。また歌詞の意味としても2番に“仁の泉か朝に夜に”とありますが、これが同門(仁泉会)のいわれと聞いています。また5番には、“南溟”(南方の大海)、“アマゾン”、“崑崙(中国古代の伝説上の山岳)”、“ゴビ”とあり、遠い海外においても医学の貢献を発展させる壮大な意望であったと思います。新しい学歌になっても、これらの旧学歌にこめた偉大な先輩諸先生の思いを若い世代にも継承していって欲しいと切に願います。

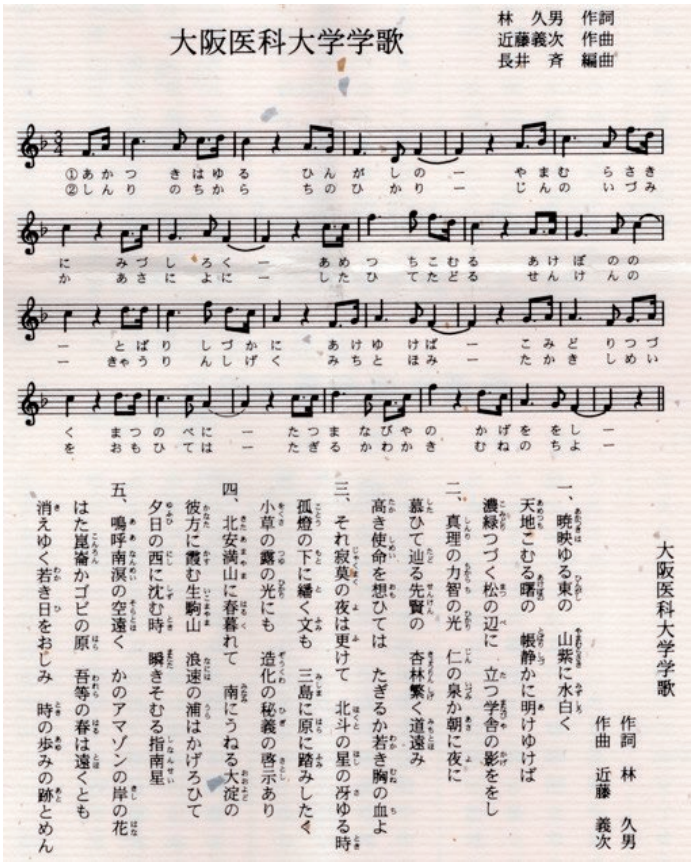



図2：大阪医科大学学歌　楽譜と歌詞